

---

raker of the existing magician for sealing ~

ごまだれ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Magical Girl Lyrical NANOHA  
The NOVEL list {Peace Braker of  
the existing magician for sea  
ling}

### 【ノート】

NO121Y

### 【作者名】

ごまだれ

### 【あらすじ】

オリ主による劇場版なのは再構成ものです。この作品は作者のほかの作品である「魔法少女リリカルなのは」とある封魔の歯車破壊」と同じ主人公ですが、内容は別物なので、そちらを讀んでいないと分からない、という事は無いので大丈夫です。\*本格的な連載は11月20日から。特にコメントも無いので、書式はこの形式

で行きますのであしからず。

## 01 プロローグ(前書き)

タイトル若干変更。

The MOVIE 1st だったのをThe NOVEL 1st  
tに変えただけです。

## 01 プロローグ

これは俺が小学校三年生の時の話。

大切な幼馴染や親友達だけの俺の狭い世界を大きく変える、新しい親友達との出会いの話であり、別れの話。

でもきつとまた会えるから。

親友達との暫しの別れを胸に、俺は今を生きていく。

次に会った時、胸を張って会えるように。

\* \* \*

奇妙な世界が広がっている。

赤い光に包まれ、何処か現実離れた世界。その世界の森の中を一体の異形の怪物が疾走し、その後を少年が一人で追いかけていた。息を切らしながら、それでも速度を緩める事無く走る少年は、一際高く跳び上がった怪物を追って森を抜けると、舗装された道に出る。そのまま向かった先には、ボートが数隻浮かぶ、大きな池があった。そしてその池の中ほど。本来立つ事すら叶わぬ筈の水面上には、先程森を駆けていたのと同じ怪物が浮いている。その怪物の姿はきまった形を持たないようで、体から二本の触手の様な物が伸びる以外、何も無い。

肩で息をしながら少年がその怪物を見つめ、怪物が少年の方へ振り替える。そんな怪物へ少年はその手に持った赤い球体の宝石を向けた。その宝石が少年の手から離れて宙へと浮くが、少年は驚いた様子を見せる事無く、怪物へ言葉を投げかけた。

「お前は、こんな所にいちゃいけない」

少年の手から離れ、宙へ浮く宝石が輝き始める。その光を浴びた怪物の体の内に、青いひし形の宝石の姿が浮かび上がった。

「帰るんだ。自分の居場所に」

少年の言葉に呼応するように、少年の前方に何かが出現した。少年の瞳の色と同じ輝きを放つそれは、俗に魔法陣と呼称される物。出現した魔法陣が完成し、より強い翡翠の輝きを放ち始めた直後、怪物の眼が開かれた。その自身の赤い眼差しで少年の姿をとらえ、威嚇するように体を巨大化させる。

それを見つめながら、少年は朗々と言葉を口にし始めた。

「妙なる響き、光となれ。許されざる者を封印の輪に！」

『Preparing to seal』

少年の言葉が終わると同時に、少年の持つている宝石に文字が浮かび、その文字と同じ内容の音が、何処からともなく響く。

すると危機を察したのか、怪物が動いた。水面ギリギリを滑る様にして、水を巻きあげ、雄叫びをあげながら少年へ向かって突撃。

そして、そのまま翡翠の光を放つ魔法陣へとぶつかつた。

張られた魔法陣が一際激しい光を放ち、青い稲光が四方へ向けて放たれる。

「ジユエルシード、封印！」

そして今夜最も明るい光が放たれた。

その明りに押し出されるように、一連の光景を『夢』と言う形で認識していた別の少年が目を覚ます。

「……………」

肌寒さで目が覚め、少年は布団の上で体を起こした。肩甲骨の辺りまで伸びる黒髪を持っている少年は、暫くぼんやりしてから、枕元に置かれていた黒い手袋をつけると、数分後に仕事を始めようと

していた目覚ましのベルを切ってしまい、布団から立ち上がる。

「ん〜……はあ。何か、妙な夢を見た気がする」

背筋を伸ばしてからそんな事を呟き、少年は髪の手を掻きながら、机の前に向かうと、その上に置かれた箱の前で逡巡し、その中から白いリボンを一本取り出した。

暫くそれを眺めてから、それを箱に戻し机の上に置かれていたゴムを手に取った。手櫛で髪を整えてから後ろ髪をゴムで纏めポニーテールにすると、具合を確認してから、手早く寝巻きからジャージに着替えた。

「さて、今日も一日頑張るか」

パンツと強めに頬を叩いて、少年は自室から出て行った。

現在未だ日が昇らず、薄暗い海鳴市内を一定のリズムでポニーテールを跳ねさせながらランニングしている先程の少年。その名前を高坂浩樹と言う。

養父と二人家族なのだが、浩樹の養父に当たる人物は放浪癖があり、実質的に一人暮らし。料理や掃除など、家事が特技というだけの小学三年生。

一応それ以外にも、養父に教えられている『永全不動八門一派・神前無刀流』の後継者という肩書もあるが、それについては浩樹自身が深く意識していない事もあって、あまり語られる事は無い。それに後継者と言っても、後継すべき師範である養父が滅多に家に帰って来ない事もあって、殆ど我流になりつつ状況だ。

「つと、ふう……」

少しだけ肩で息をしながら、浩樹は何時ものランニングコースを終え、自宅の門の前で立ち止まった。軽く体をほぐしながら、自宅へ戻り、まずはシャワーを浴びた。

軽く汗を流してから歯を磨いたり、顔を洗ったり制服に着替えたりにして身支度を整え、最後に髪を結う物をゴムから今朝がた手に取った白いリボンに変え、同じようにポニーテールに変え、シャワー

を浴びる為に外していた黒い手袋を再び装着。

「……うん。よし。いい感じ」

机に置かれた鏡を見ながら自身のポニーテールの具合を確かめ、一つ頷くと鞆を片手に再び部屋から出ていく。そのままキッチンへと向かい、エプロンをつけて朝食と弁当を作り始める。メニューは既に決まっているのか、特に淀みなく手が動いて行くが、身長が足りない事もあって、足場の代わりにしている椅子を一つ降りたり登ったりを繰り返して、余り効率がいいとは言えない。

浩樹自身がそれを見越して、必要以上に早起きをしている為、時間的な余裕はあるが、頻度の多い上下運動と重い椅子の持ち運びのせいで、ランニングを終えて帰って来たよりも息が荒いのは気のせいではないだろう。

結局一時間以上の時間をかけ、漸く朝食と弁当作りを終えた浩樹は、時計を確認すると溜息を一つ。

(時間が無いな。朝食食べたら直ぐ出ないと、のんびり歩いていけないか。洗い物……帰って来てからだな)

少し強めに頭を掻くと、浩樹はとりあえず椅子に座り、一人きりの朝食を始めようとした。その直後、ピンポンとインターフォンが鳴った直後「おはよー」という少女の声と共に玄関の開閉音。

声の主はそのまま家上がり、浩樹も特に気にする事無く椅子に腰を下ろして食事を始めた。

「えっと……あ。浩樹君。おはよう」

「ああ。おはよう、なのは。悪い、まだ朝飯食べてるから、少し待ってくれ。それとも食べるか？」

「食べて来たから大丈夫」

浩樹が食事をするタイミングに入って来た少女、名前は高町なのは。浩樹の幼馴染で高坂家のお隣さんである高町家の末っ子であり、浩樹と同じ小学三年生。二人とも聖祥大付属小学校へ通っている為、朝は基本的に二人揃っての登校が殆どであり、そう言う時は大体浩樹の方が遅いから、なのはが浩樹の家まで来る事が常だ。



なのはは食事を続ける浩樹の対面の椅子に腰を下ろすと、両腕の肘をテーブルにつき、自身の手の上に顎を置いて、ニコニコと笑いながら浩樹を眺めている。浩樹としても慣れてきているからか、特に何も言うことなく、遅過ぎず速過ぎずの速度で箸を進めていく。

「ねえ、浩樹君」

「なんだ、なのは？」

「美味しい？」

「俺の価値観ならな」

因みにメニューはほうれん草のおひたしに焼き魚。味噌汁に白米に漬物と言う和風テイスト。良く言えば健康的、悪く言えば非常に歳不相応で爺臭い。

そんな食卓を眺めながら、なのはが口を開いた。

「おひたしかな」

「ん？ ああ。ほれ」

「あーん。……うん。美味しい」

「なら良かった。ほうれん草を浸けておく出汁を変えてみたから、どうかかって思ってたんだけど」

「十分美味しいよ。浩樹君、家事得意だし、お嫁さんに貰えれば幸せだね」

「俺は男なんだが」

まったく呟きながらも、満更でもなさそうな浩樹は、照れ隠しからか、自分からは特に何か話す事無く、黙々と箸を進めていく。なのはもなのはで、浩樹の反応に満足がいったのか、やはり特に何も言う事無く、先程まで同様にニコニコと笑いながら浩樹の食事を眺めている。

何処か落ち着いた、熟年夫婦の様なそんな雰囲気。しかしそんな食卓も、浩樹が箸を置き、静かに手を合わせて「ごちそうさま」と呟いて終わった。

食器を流しへ置き、軽く水洗いだけをしてから、コップに水を入れて口の中をゆすいで、近くのタオルで手を拭く。

普段やっているそれらを全て済ませ、浩樹はなのはの方へ振り返った。それに合わせなのはも立ち上がり、浩樹は自分の座っていた隣の椅子に置かれていた通学鞆を手に取ると肩にかける。

「それじゃあ、行くか」

「うんっ！」

浩樹の言葉になのはが頷き、二人並んでダイニングを出ていく。

少ししてから玄関の開閉音が聞こえて、鍵がかけられ、高坂家は無人になった。

住宅街を並んで歩く浩樹となのは。二人以外に彼らと同じ制服を着ている生徒は見当たらないが、それは何時もの事なので、二人とも気にする事無く、のんびりと道を進んでいる。

「そう言えば浩樹君」

「なんだ？」

「今日、変な夢を見たの」

「変な夢？ ……：そういえば、俺も変な夢を見たな」

「浩樹君も？」

「ああ」

頷き、浩樹は自分の見た夢を簡単になのはに説明した。すると、なのはが驚いた様にその言葉に反応する。

「私も！ 私もその夢、見た！」

「まじ？」

「うん！ 私は、その先の男の子が飛んで行く所まで見たけど」

性格には『吹き飛ばされた』である。

「そっかあ。えへへ。何か嬉しいかも」

「そうか？ 朝から妙な物見させられて、俺としては最悪なんだが」

「でも浩樹君と同じ夢を見れたって言うのは嬉しいよ。初めてだし」

「それはそうだろ。夢なんて被る物じゃな なのはっ！」

「ふえっ!?!」

十字路に出ようとしたなのはの襟首を掴み、慌てて引き寄せる浩

樹。その直後、猛スピードで十字路を車が走って行った。そのまま  
でていれば、間違はなく轢かれていただろう。しかし、それ以上に  
問題はあの車は浩樹となのは、両名の視界の外から現れたにも拘ら  
ず、浩樹がそれに反応した事である。

結果として、なのはは車に轢かれる事無く、代わりに浩樹がな  
はを引き寄せた時の衝撃で、近くの塀に思い切り後頭部をぶつけて  
いた。ゴツと鈍い音が響き、なのはが浩樹の顔を見ると、少し涙  
目になっている。

「だ、大丈夫！？ 浩樹君！？」

「こつちの台詞だ。なのは、大丈夫か？ 怪我とか無い？」

「私は平気。浩樹君が受け止めてくれたし」

「ならいいんだ。なのはが無事で良かった」

砕けた笑みを浮かべる浩樹。それから浩樹は少しずつなのはの体  
を押して距離を開けさせ、自分の後頭部を手で探る。そこにコブの  
様な脹らみを見つけると、溜息を一つ。

そんな浩樹になのはが心配そうな視線を向けるが、浩樹は苦笑い  
を浮かべるだけで、特に何も言う事無く、再び道を歩き始めた。慌  
ててなのはがその隣に並ぶ。

「大丈夫？」

「ちよつとコブになつてただけだから。これくらい平気」

付き合いの長さから、浩樹にこれ以上何を言っても無駄だと言う  
事が分かったなのはは早々に話を変える。

「……でも、相変わらず浩樹君、凄いよね。何時もの悪寒？」

「ああ。まあな」

料理などの家事、一応養父から教わり、現在ではほぼ我流になり  
つつある神前無刀流の武術。それに加えてもう二つ。浩樹には特技  
と言つか、特異な点があった。

その内の一つが、先程浩樹がなのはを腕を引き、事故を未然に防  
いだ事と繋がっている。

「つつても、勘がいいってただだ。大したものでも無いだろ」

「そんな事無いよ。何回も助けて貰ってるし」

浩樹の勘がいいだけと言うそれは、言うなれば危機察知だ。自分を含め、周囲の人間に何かしらの害や危険が迫ると、浩樹の背に悪寒が走ると言う、虫の知らせの様なもの。

しかしその精度たるや恐ろしいもので、小さいものは空から落ちてくる鳥の糞から、果ては電車の脱線事故まで。あらゆる危険を見事に当てて見せる。だが残念な事にあくまでも悪寒が走ると言うだけの事。

危険度に応じて悪寒の度合いは上がる物の、その危険が具体的に分からない。だからこそ悪寒が走ったら、先ずは周囲の人間を庇うようにしている、と言うだけ。

少なくとも浩樹にとってはそれだけなのだが、なのはにとっては違うらしい。時折学校である抜き打ちテストや、転びそうになった時など、ちよくちよく助けられているのはからして見ると、本当にありがたいことらしい。

「何時もありがとね、浩樹君」

「……」

照れ隠しから、浩樹が足を速める。なのはが追い付きそうになると再び足を速めて、を繰り返して行くうちに、何時の間にか歩く速度は全力ダッシュへと変わり、浩樹はバス停に到着していた。

はて、と首を傾げながら浩樹が首を動かすと、此方に向かって息を切らせながら走って来ているなのはの姿が見え、その向こうからは自分となのはが乗るべきバス。

「なのはー！ バス来てるぞー！」

「ほえっ!?!」

走りながら後ろを向くと、なのはの眼も走って来るバスを捉えた。更になのはが速度を上げて走るも、バスは無情にもなのはを抜き去り、なのはよりも圧倒的に早く、バス停に到着してしまった。

待っていた浩樹を乗車させる為、ドアが開く。浩樹がバスのタラップに足をかけながら、手袋を外す。

「なのはー！ 早く来ないと、バスに素手で触るぞー！！」

「駄目だよ！？」

「止めなさい！！」

どんな意味があるのか分からない事を浩樹が言っていると、此方に向かつて走って来るのはと、バスの中から少女の声のツツコミが聞こえ、浩樹は肩をすくめながら再び手袋を装着する。

やがてなのはが息を切らしながらバスへとたどり着き、息を整える為に、ドアに手をつきながら肩で息をしている。そんなのはの手を引きながら、バスの中へ入り、運転手に「おはようございます」と浩樹が挨拶をすると、「こつちこつち！」と浩樹となのはを呼ぶ声がバスの奥から聞こえて来た。バスの最後尾の席に座り、此方に手を振る金髪と紫髪の少女に軽く手を振り返しながら、浩樹はなのはと共にその席まで移動した。

「おはよ、アリサ、すずか」

「おはよ、浩樹、なのは」

「おはよう、浩樹君、なのはちゃん」

「お、おは、お……」

「あんたはいいからとりあえず、座りなさい」

並んで座っていた金髪の少女、アリサ・バニングスと、紫髪の少女、月村すずかが二人の間に一人分の席を開け、浩樹が其処になのはを座らせた。浩樹もアリサの隣に座ると、それを確認したバスの運転手がバスを発車させる。

未だに息が切れたままなのはは肩で息をし、そんななのはの背中をすずかが擦る中、「それで？」とアリサが浩樹に話を振った。

「あんた、本当にバスに触る気だったんじゃないでしょうね」

「まさか。流石にそれはな」

「気をつけなさいよ。此処でいきなりバスが動かなくなつて、立ち往生とかになつても大変なんだから」

「分かつてるって」

先程の危機察知同様、浩樹のもう一つの特異な点。

それは浩樹が素肌で接触した機械類は、揃って機能を停止してしまう事だ。それこそ大小問わず、携帯電話からバスまで。一度間違えてバスに触れてしまった時は、エンジンがかからなくなって大変な事になった。それゆえ、浩樹は基本的に手袋を着けている。

しかし触った物が永遠に機能停止になるかと言われればそう言う訳ではなく、その機能停止になった機械類の大きさに比例して、機能が復活するまでの時間が短くなる。携帯電話や目覚まし時計の様なものは丸一日動かない時もあるが、バスや電車等の大きなものは長くても六時間ほど。短い時は三十分ほどで機能が復活する。

何故そんな事が起き、何故機能停止の時間に差があるのか等、いくら浩樹が調べても規則性の様な物が無い為、現状浩樹が分かっている事がとりあえず直接触らなければいいと言う事と、自分がこの力を制御で来ていないと言う事の二つだけといった状況である。

「安心しろよアリサ。そんなことしないから」

「それならいいけどね。……実際に触るならなのはの携帯にしなさい」

「アリサちゃん!?!」

漸く息が整ったのか、なのはがアリサの言葉に反応した。

「何で私の携帯なの!?! 駄目だからね!?!」

「だって誰も困らないじゃない」

「私が困るよ!?! そんな事言ったらアリサちゃんの携帯だって、私が困るじゃない」理不尽過ぎるよ!?!」

全くである。そんな中、浩樹は自分の携帯電話を取り出すと、手袋を外してそれに触った。電源が落ちたように画面が消える。ボタンを押しても反応が無く、諦めたように携帯をポケットへと戻した。「本当に何なんだろうな」

自身の手を眺めながらそんな事を呟く浩樹。しかし浩樹の隣に座る三人には当然その答えがある筈なく、妙な雰囲気になってしまった四人を乗せ、バスは聖祥大付属小学校へと向かって走って行く。

いつも通りの朝だ。妙な夢こそ見たものの、それ以外は特別おかしなことが無い、平凡な朝。

でも淡々と日常から非日常へとどんどん近付いて行っている。

その事に、浩樹は気が付いていなかった。

## 01 プロローグ（後書き）

初めましての方、初めまして。作者の他の作品を読んで下さっている方、ありがとうございます。ごまだれです。

劇場なのは（以下、原作）の再構成、というよりどちらかというところ作者の別作品「魔法少女リリカルなのは」とある封魔の歯車破壊（以下とある封魔）の再構成の様な気もしないでもない、最新作「Magical Girl Lyrical NANOHA THE MOVIE 1st Peace Breaker of the existing magician for sealing」（以下、LNPB）の第一話。此処まで読んでいただき、ありがとうございます。

一応、とある封魔を知らなくても問題無い作品には仕上げているつもり、というより、とある封魔を読む前に此方呼んで欲しいかもしれません。説明的な意味で。

さて今回はとある封魔の方では完全ぶつ切りで終わったユーノVS ジュエルシードと、原作には無かった浩樹となのはの朝の風景をお送りしました。そのせいでかなり長いうえに、原作開始十分どころか五分も経ってないわけですが。

これを読んで、興味を持っていただければ、とある封魔の方も読んで欲しいなあと思います。

最後に一応告知です。

LNPBの番外編、映画で言う所にオーディオコメンタリーの様なものや、キャラクターのスペック紹介、劇中の閑話等を載せる予定の



「Others of LNPB(仮)」を同じく20日より掲載  
しています。

此方は不定期なので、あまり期待しないでいただきたいですが、よ  
ろしければそちらもどうぞ。

改めてここまで読んで下さりありがとうございます。

次話は明後日。ごまだれでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0121y/>

---

Magical Girl Lyrical NANOHA The NOVEL 1st ~ Peace Braker of the existing

2011年11月20日00時27分発行